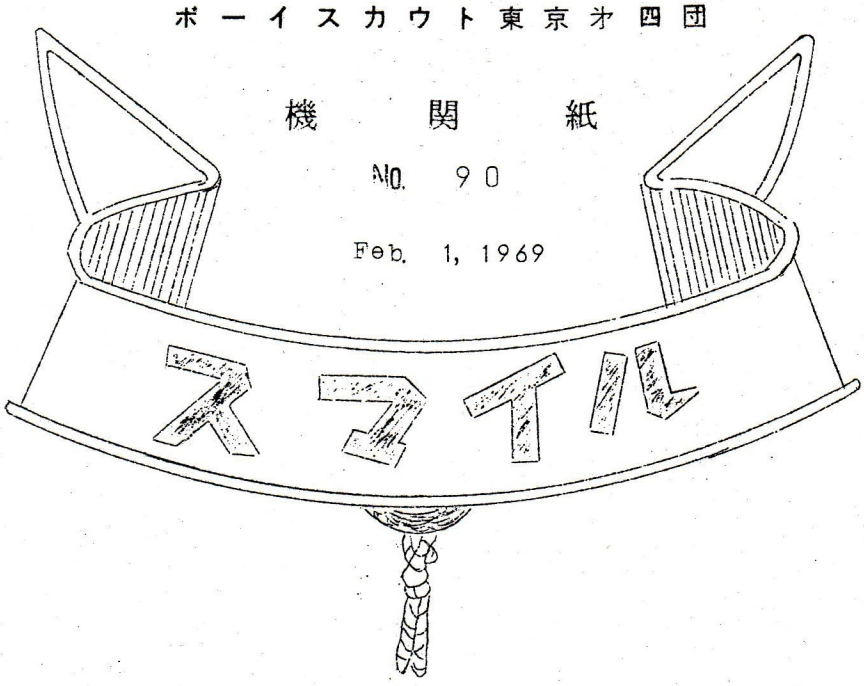
ボーイスカウト東京才四団

機関紙

No. 90

Feb. 1, 1969



アブラハムと共に旅を

霊南坂教会牧師　飯　清

人生はしばしば旅路にたとえられます。しかし同じように旅路といっても、信仰に生かされている者と、信仰をもたぬ者との間には大きな相違があります。「旅の恥はかきすて」という無責任時代そのままの態度や、「人の世は重き荷を負いて、遠き道を行くがごとし」というあきらめが先に立ったような生き方と比べて、聖書が教えるのは「この世の旅人であり寄留者であるから、魂に挑む肉の欲を避け」（Ⅰペテロ二・一一）て責任と自制とをもって進むのですし、忍耐と努力とを必要とします。

私たちは一九六九年の新しい歩みをふみ出そうとするとき、信仰の旅人アブラハムについて学びたいと思うのです。

彼は故郷に住んでいた時、神から「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい」との命令を受け、直ちに出発しました（創世記十二・一）。カルデヤのウルからハランを経てカナンの地ベテルに行き、ネゲブからエジプトに移り、再びベテルに住み、ヘブロンに参りました。アブラハムは神に示された時から、二度と石造りの家に住まず、一生を天幕の中で暮しました。「天幕暮し」とは仮の住居ということです。一番始めに、最も懐しく執着のある国と家と親族とから別れたアブラハムは、どこへでも動いて行きました。神様の示されるところは「どこまでも」行くのが信仰者の生き方です。天幕に住んで、余分のものを持たず、必要最低限度の装備だけで出掛けるのです。「待って」とも、「また後から」とも言わず、直ぐに天幕をたたんで、次の目標に向って進みはじめるのです。それが神の命令であれば「従順に」、余分の物をもたぬ「質素」と、未知の土地でも進んで行く「勇敢」をもって、アブラハムははじめての人にも「親切」でした。

信仰者アブラハムの生き方は、スカウトの理想と方向に合致しています。私たちもこの一年アブラハムと一緒に旅行を続けて行きたいものです。

少年隊　守戸　修

ぼくは、去年いろいろな事を体験しました。失敗した事も、また、よかった事もありましたが、何と言っても一級、また、少年菊スカウトになれたことです。ほんと言って、一級は、二級また菊スカウトをとる事ほど、むずかしくありませんでした。そのころ班長だった河辺君にいろいろと教えてもらったり、はげまされたりされながら、わりとスムーズにうかってしまいました。しかし、菊スカウトは、このようにスムーズにはいきませんでした。一つ一つ細かくレポートを書いたり、また書き直したり……。何といっても時間のかかったのは、技能章でした。ひと月に三つしかとることのできない技能章、何としてでも一回に三つとり、早く菊スカウトに近ずこうとは思うのですが、一回に二つとるのがせいいっぱいでした。いよいよ菊スカウトの試験。四〜五人の各団のリーダーが、机ごしにすわり、その中には、ぼくらのリーダー、大内副長もいました。才一回目は失敗。いざとなると、自分の考えに自信がもてないものです。それから一カ月後……やっと全部うかりました。

このようなうれしい事ばかりではありません。ぼくは、夏季キャンプで、班長なのに、「けがはこのようにするのだよ。」とでも言うようにサイトに着いてすぐ、カマでバッサリと足を切ってしまいました。みんなの努力のすえ、最優秀班となることはできましたが、何か心のこりがあるように思われます。

考えよう　今年こそ！

去年は、このようないろいろな事がありました。今年は、もう菊になったのだからなどと、もう何もやらなくてよいと言うわけにはいきません。まだ技能章だって二十八個ものこっていますし、今まで学んできた中には、忘れてしまった事もあるでしょう。そのような事、また今までに学んだ事を、確実にわからさなくてはなりません。少年技能章も、とれるのは今のうちです。どんどんとった方が、技能も身につくし（こちらからお金をはらわなくてももらえるし）いろいろな面で、役立ちます。今年こそは、自分の知識をふやし、どんな事でも、班員また、ほかのスカウトに教えられるようにならなくてはいけないと思います。また、何事もやる気さえあればできます。そのような事を班員などにたたきこませ、進級という事に興味をもたせたいとも思っています。そのようになってこそ、ほんとうの班長また菊ではないかと思います。

（タイガー班班長）

年長隊　渡辺　誠

シニアに入隊してから二年間、今は上班として張切ってシニアの活動を行っています。しかし、シニアは長年の間、縁の下の力持で役者でいえば脇役、そのために誤解されたりしてきた。しかし、「今年こそ！」主役となりシニアの活動をみんなに理解してもらうためにぼくだけでなくみんなも努力するつもりです。しかし後一カ月ぐらいでぼくは休隊せねばなりませんから、一学年下の人たちがこの一年間シニア活動の実質高揚を脳裏に秘めながら邁進してくれると思います。ついてはシニアも他の人々から認められるようになることでしょう。

「今年のシニアの連中には前進あるのみその辞書に不可能という文字はない。」

（上級班長）

新しいカビング

年少隊隊長　大島啓義

すでに知っている人もいると思いますが、来年から日本連盟の規約に基きカブスカウトは、今までのものよりも一層新しく楽しいカビングへと移行しようとしています。ここで、カブはボーイスカウトに入る前の準備段階であって小学校の二年から五年までの子供が、同じ制服を着、同じ場所に集り、同じやくそく、さだめの中で行っているのがカビングであると思っている人がいるのではないでしょうか。

たしかに、おとなの考え方が先にたってしまい、子供の願いだけを中心とした遊び方式のカビングが多かったように思われます。しかしめまぐるしいほどの世代の移り変りと同時に、現世代における私達もスカウティングの構想をより明確に認識しなければならないと思います。

そこでまず、カビングはスカウティングの一部門であり、ボーイスカウト教育全般の一環であるということを認識して頂きたいのです。スカウト教育の目標には、人格、健康、技能、奉仕がかかげられています。日々のスカウティングを通して健全、善良、有為で幸福な人生を過すことにあると思います。カブスカウトも基本理念では、ボーイスカウトと全く同じものです。

ただ、心身の発育段階に応じた目標、訓練、組織、方法をとっているにすぎないということです。いいかえれば、カブの年令で目標として示した肉体的、技能的能力や他人への思いやりの心、その他の〝たしなみ〟を身につけてB・S→S・S→R・Sと進めば必ずよい市民として、国民として有為で世の中に役立ち、又個人としては幸福な人生を送ってくれるであろうと考えているからです。

このことはカブスカウトからローバースカウトまで一貫した理念のもとに、各年令層に応じたプログラムを提供することです。従って各部門ごとに基本理念の相違があってはおかしいものです。

以上のような基本理念のもとにカビングの移行は行なわれます。その主なものとしては特に今迄の各年令に応じた進歩制から、やる気をおこさせる自発性の促進に、地域社会との関連、スカウト教育に関連した大人の積極的参加ということがあげられます。

以上のべた中にも私達がこれから話す中にも、カビングの移行という言葉を聞かれると思いますが、この移行というのは改正ということではないということを忘れないで下さい。カビングはスカウティングの一部門であり、基本理念も同じであるということ、移行といっても目標が変わるのではなくあるべき姿の典型的なカビングがもっとわかりやすく具体的に取り入れられるように工夫されたにすぎないということを、それぞれ認識していただけるようお願いします。

あぶない！

まっ赤に燃えている
ストーブのまわりで
あばれるのは
やめよう！

父兄雑感

菊地揖子

「僕もボーイスカウトになりたい」と云い出したのは、まだ幼稚園にも行かない頃だったと思います。教会で、街角で見かける制服姿は彼の憧れでありました。しかし何としても二年生になったばかりの子供に、世田谷から四団まで通わすのは遠すぎると思い、杉原さんに家の近くに良い団がないものかと相談しましたが、杉原さんは「中々ありませんね。リーダーの良い団であることが大切だし、四団にしたらどうですか。」と云われ、段々大きくなる事だしと四団に入れて頂く事を決意しました。所が面接日も間近かな或日、突然スカウトに行くのは嫌だ、と云いだしたのです。私は慌てました。けれども、「貴方がどうしても行きたいと云うからお願いしたのに、今になってそんな事を云い出したら、面接日を決めて下さった方に失礼だし、とに角行くだけは行きましょう。そして隊長が貴方にどうだとお聞きになる時、自分の思った通りの事を云いなさい」と云って面接に臨みました。

「どうですか、君自身はスカウトになりたいですか」と云う隊長の問に対して、彼は意外にも「はい、なりたいです」と答える事が出来、四団の一員にさせて頂く事になりました。それから丸三年半、殆んど休む事もなくカブ時代を過し、昨年九月からはボーイスカウトになりました。躰には多少大き目の紺色もあでやかな制服に丸いカブ帽のあどけないカブが、すっかり長くなった脛に緑色のガーターを飾り、広い縁のスカウト帽をかぶって颯爽と少し気取って歩いて行くスカウト姿になるまでには、彼は彼なりに辛い目にも合い、努力もし、頑張って来た尊い日々があったのだと思うと、いぢらしさと頼もしさに胸をうたれる時があります。これも子供にとって魅力溢れるリーダー方の熱心な御指導のおかげだと感謝しています。神と人とに仕えると云う同じ意味を無意識の中に感じているのでしょうか、週一度の集会を、日曜日のC・Sと共に、学友の誘いも断って当然の事として続けている彼なのです。どうか素直に教会の中のスカウトとして成長していって欲しいと願うものでございます。

（少年隊　父兄）

スカウト○○シリーズ

一、真冬なのに集会中、いきがって半袖でとおして風邪をひく○○

一、男の子なのに、ブラウニーに暴力ふるわれてメソメソしている○○

一、クリスマス、新年会と女の子との集会が続き、ヤニさがってばかりいて、ちっともしまりのない○○

一、年賀状をリーダーに出したら宛名違いで戻ってきてしまう様な○○

一、宛名を間違えて戻ってきては困ると思って出すのをやめた○○

一、出すのをやめたのが抽選で当ってしまい困っている○○

一、自分が相手に出した番号が一等に当ってしまい歯ぎしりする○○

（辻編集員）

行事報告

一月四日　日の丸行進（日比谷公園ー都庁前）、年長隊が参加しました。

一月十一日　おもちつき、新年会もかねてGS、BSのお母様方のご協力をいただいて、からみ餅、おしるこ、おぞうにをつきたてのホヤホヤで作って楽しみました。

一月二十五日　指導者感謝会

去る一月二十五日午後六時半より港区青年館に於いて日頃ご奉仕下さっている指導者への感謝と父兄との親睦をかねて毎年行なわれている感謝会を行った。出席者は杉原副団委員長をはじめ指導者十一名、父兄十七名の合計二十八名であった。

大島年少隊々長からは、連盟での改革にもとづいて隊内でもいろいろ考えて慎重に事をはこぶ年にしたい。又柳少年隊々長からは、世界ジャンボリをひかえ、対外的活動にも積極的に参加する年に。そして、日下部年長隊々長からは、具体的には移動キャンプ成功への助力と自主的活動を推進したい、とそれぞれ各隊長から今年の抱負がのべられ、杉原副団委員長は、団の健全な運営のもとじめたる団委員会再建の決意と共に、リーダーからの希望も受け入れ、かつ指導にも当たれる団委員会をと、教育の場としてのスカウティングへのビジョンが語られた。また食事を共にしながらの懇談会では、次のような事が話し合われた。

四団自身がもつ問題として、地域社会とのかかわり合いを今後どのようにするか。父親の会を設けて健全な助力を求めたい。子供はあくまでも親の責任であるから、指導者にあずけっぱなしでなく、両親が積極的に活動に参加して、よりよいスカウト運動を作りあげてゆくべきである。

その他、学園紛争問題などが語られ、九時散会となった。

人事往来

おめでとう！　富士スカウト！

河辺章夫少年隊副長補は、名誉ある富士スカウトになりました。

感謝

赤坂ライオンズクラブから、十人用の新しいテントの寄贈がありました。

行事予定

二月二十二日（土）少年隊は才二十二回目の誕生日を迎え、記念式典を行います。

おことわり

定例通り十一月、十二月の団会議、団委員会はそれぞれ行なわれましたが討議内容は行事に関することでしたので省かせていただきました。

編集後記

四団としては、ペッタンペッタンといとも平和な今年の幕あきでしたが、日本のかかえている問題もさる事ながら、四団のかかえる問題もこれ又多く、かつ根深く、うち、そと、共に他人事ではいられない年のようです。

ライオンズクラブからの新しいテントを広げる時、今月の飯先生の冠頭の言、「アブラハムの天幕生活」と。スカウティングの中での「テント生活」を改めて考えてみたいものです。

今年の才一号が二週間も遅れた事をお詫びします。予定した原稿も世の中のあわただしさと相まってか半分がやっとで、少し寂

しい号となり、人員のいたさぬところが、
と大層な打撃を受けております。
今年もどうぞよろしくご協力下さい。

スマイル
発行日　昭和四十四年二月一日
発行人　田中正男
編集人　杉原正
発行所　港区赤坂一ー一三ー六
日本ボーイスカウト東京四団